

磐座学論文「イワクラのメッセージ」

鈴木 旭

イワクラ(磐座)とは何か。ずばり、ここから入って行くことにすれば、最も適当な解答としては次の通りであろう。本会名誉会員である佐治芳彦氏(古代史研究家)は次のように述べている(新人物往来社刊「謎の巨石文明と古代日本」)。

「ふつう磐境・磐座とらび称されているが、磐境は『神籬(ひもろぎ)』とともに、神社の原始形態とされている(神域を示す)。その『磐』は『堅固な』という意味の形容詞とされているが、もとは『山の石』つまり、『磯の石』(小石)に対する『岩』(巨石)であり、磐境とは、たんなる『齋場』ではなく、『岩』(巨石)で囲まれた『神域』だったものと思われる。

一方、磐座は、神のいます堅固な座(席)ではなく、神が鎮座まします山中の大きな岩(巨石)をさしていた。この巨石は、自然石か、地面

から露頭している岩の場合がある」

こうして見ると、イワクラとはたんなる巨石巨岩という物理的表現で形容されるのではなく、あくまでも「神体岩」として祭られる岩のことを指すことは改めて繰り返すまでもないようだ。しかしながら、やはりすつきりしないところがあるのも事実。それが神道との関わりにおいて述べられてきたにすぎないからである。

そればかりではない。欧米では「巨石文化」だの、「巨石記念物」だの、さまざま言い方をして磐境・磐座を「メンヒル」「アリニユマン」「ドルメン」「ケルン」と分類すれば、わが日本でも考古学の世界を中心として「立石」「環状列石」「積み石」「配石遺構」等々と言いついているのであるが、神道とは関わりを持たない物理的表現が跋扈するようになり、

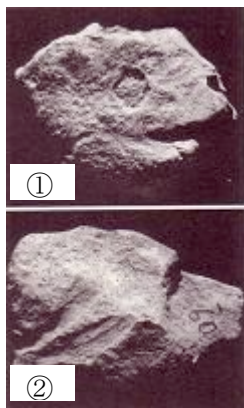
何がどれやら、さっぱり判らないという表現上の混乱状況が続いているのである。

この際、こういう混乱状況を脱するためにも新しい時代における巨石文化論としてイワクラ学を整理し、体系化して行く必要があることを訴えておきたいのである。そのために貴重な経験となった筆者の「黒又山ピラミッドの総合調査の教訓」を紹介する。

秋田県鹿角市において、黒又山ピラミッドの本格的調査が始まったのは、平成4年(1992)春のことだった。この時、注目されたのは、小さな文明の利器としての生産用具の石器だけではなく、大きな祭祀対象としての岩偶や配石遺構、祈りの岩、磐座、岩刻文様が刻まれた石造遺物の調査にも力を注いだことであ

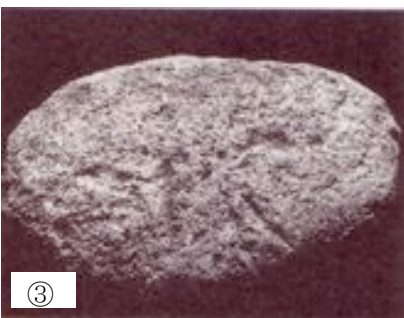
った。

従来の考古学的手法による調査では無視されてきたか、無視されないまでも見落とされるか、十分な調査研究が行なわれてこなかった石造遺物が真正面から見据えられ、調査対象として設定されたことである。その成果は大きく、「縄文文化の解明には不可欠の視点と方法を提示した」と内外の関係者の間で話題となった。



たとえば、黒又山参道で採集された「岩偶」だが、仮に第一群としておく。大きさが人頭大であり、持ち運びのできる程度の大きさであることが特徴だ。まるで犬か、狼のよう

な動物の頭を模倣して刻み込んだ①岩偶(14×10×6各cm)。①と似た動物の頭を刻み込んだ②岩偶だが、それが何なのか、まったく判らない(11×10×4.5各cm)。石の中央に縦縞のような溝が数本刻まれ、その上の左右に窪みがある③岩偶(13×10×5各cm)。



これらの岩偶は、持ち運びができる人頭大の大きさであることが共通点であり、いずれも動物の頭が模倣的に刻まれていることも共通しているため、筆者は運搬可能な奉納品のように思われたのであるが、調査団長の加藤孝教授(東北学院大学考古学)は次のように判定された。「これらの装飾石は、本来山頂には

なく、クロマンタ(黒又山)山頂近くの急斜面の壁に『ハメ込マレ』たもので、永い年月に転落したものではないかと考えられる」(鈴木旭編『古代日本ピラミッドの謎』 尚、加藤教授は同じ論考の中で「時期、時代について、認定すると縄文期と考えられ、文字にもならず、絵画にもならず、呪術の神秘性の高い資料である点だけを強調するに止めるよりほか、生来に解決を伺うことしたい」



第一群が巨石遺構である。黒又山の北側に聳え立つ黒森山の南東麓にある④おなこ岩。三角形のお結び形になっているのが特徴。中央右寄り「目玉」(意味は折る)のペトログ

リフ(古代岩刻文様)が見られる。それから黒森山の南西麓に⑤衣かけ岩。見たところ、女性器の外形そのものに見える。



また、黒又山の東北東に⑥お化け岩。カッパのような顔をしている。いずれもロックアート(古代岩刻芸術)の代表例である。



④⑤共に女性に関わりのある名

称の岩になっているのは、どういふことであろうか。④の目玉の文様は水神様(雨乞い岩)であることを示し、水源地に立てられているのが普通であり、目玉は聖地を凝視している。⑤は安産祈願の岩だろうか。はっきりした伝承は知らない。⑥についてはまったく判らない。

この他、直接調査することはなかったものの、あえて指摘しておく必要があるのは黒又山のすぐ近くにある⑦大湯環状列石(ストーンサークル)である。大湯環状列石には、野中堂遺跡と万座遺跡と二つの環状列石があるが、他にも幾つかあり、これらを第三群としておく。一応、鹿角市教育委員会では縄文後期に作られた墓地であると判定しているが、そんなものではない。

この種のものには配石遺構と呼んでいいものかもしれないが、忍路環状列石(北海道小樽市)にかぎらず、どこでも正式な調査が行なわれたという話はあまり聞いたことがない。どのように調査すればいいのか、それ自体、まだ判っていないのである。発掘すれば済むわけではないし、外

観観察をすればいいわけではない。何か、現代科学を超えた秘密が隠されているような気がしてならない。そこに謎がある。

われわれはまだ何も判っていないのではないだろうか。こうした石造遺物の調査を通じて判ったことは、まだわれわれは何も判っていないことである。それが何であるか、判っていないというだけではない。どうすればいいのか。それさえも判っていないのではないだろうか。

鈴木 旭



略歴

歴史作家

主な著書

『超古代日本』

(アスペクト社)

『日本超古代遺跡の謎』

(日本文芸社)

『クロマンタ・ピラミッドの謎』

『日本古代ピラミッドの謎』

(新人物往来社)

『古代史の封印を解く日本ピラミッドの謎』

(学研)

他多数

一言コラム

黒又山が存在する東北地方は、千年以上もの昔、蝦夷と呼ばれる一族が支配していた。朝廷の命を受けた坂上田村麻呂により彼らは討伐されることとなるが、アラハバキと呼ばれる異民族の神を崇拝する彼らが残した奥深い山に囲まれた土地には、それ以外の地方とは一種異なる巨石文明の残滓を感じることが出来る。

黒又山以外にも『日本ピラミッド』の可能性のある山は大石神、姫神山、五葉山、靄山など多数存在し、秋田県の大湯ストーンサークルに代表される環状列石群も太子、小牧野、湯船沢など多数存在し、これらの数は他の地域に比較してもかなり多い。

異形を誇る数々の奇岩も、エイリアンそっくりの石神さま、弁慶が持ち上げたと言われる絶妙のバランスの続き石、岩手の名の由来となった鬼の手形石など枚挙に暇が無い。

最果てに陸奥国を抱え、過去奥羽と呼ばれた東北地方は、その奥深い山の障壁もあって、21世紀の現代においてもその謎の霞に包まれた全容を明らかにしていないように思える。幸いなことに、先に例として挙げたように東北地方には我々イワクラ学会の研究対象となりえる奇岩・巨石・磐座の類はそれこそごまんと存在する。霞の向こうに存在する、この謎に満ちた地域に光を与えることも我々の使命なのではないだろうか。